連載　姿勢管理における体幹前傾

神戸総合医療介護福祉専門学校　作業療法士科　原　義晴

1.はじめに

運動障害を伴う子どもたちに対して援助者特にセラピストは、骨盤から体幹・頭部にかけて中枢部を安定させながら目的とする動作を誘導することが多い。このような直接的な関わりへの援助は、子どもの後方や側方から実施される。しかし、課題が明確で子どもの意思を尊重しながら援助者との共同作業として遂行する場面では、動作の誘導に対する追随の仕方だけでなく表情や視線移行及び言語内容など子どもの反応をきめ細かく受け取る必要がある。この様な場合は、子どもと対面で課題を遂行した方が、相互のコミュニケーションが展開しやすい。そして、子ども自身が自ら姿勢や動作の方法を自己修正する機会が増し問題解決能力を促すこともできる。

今回、子どもたちへの援助において対面でアプローチする意義とその適応について述べる。

2.対面的アプローチの意義

養育者は、赤ちゃんをずっと抱いているだけでなく背臥位にして対面から表情豊かに声かけしながらコミュニケーションをとって過ごす時間も多い。これは、高等な霊長類ほど多く観察できる育児様式とされる。竹下は、この育児様式を通して見る・見られる関係から子どもの内面に関心を向けることが言語や道具操作へと進化したと考察している。

子どもと対面で接することで養育者は、子どもの様子を映し出そうと模倣する。これが子ども側にとっても自己や他者の存在に気づく機会にもなっている。抱っこなど直接的な接触だけでなく表情や声かけ時にはおもちゃなどを伴う相互の社会的交流が、信頼できる他者を得てあのようにしたい・あのようになりたいなど言語機能を含む模倣や意思活動を育む。

3.体幹前傾座位保持での関係発達

運動障害を伴う子どもたちは、姿勢バランスが不安定で対面的アプローチの機会が少なく継続させることも困難である。また、背臥位や背もたれ椅子座位では、抗重力的運動要素が多くなり非対称姿勢の増大につながりやすい（写真1）。

写真1　背もたれ座位姿勢

逆に抗重力姿勢に設定することで、体幹・頭部が安定すれば上・下肢は従重力方向にリラックスしやすい。このため、運動に絶えず過剰努力を伴うことはなく援助者の誘導にも追随しやすく上肢・手の運動感覚の学習を促進できる。写真2は、体幹前

座位保持の意義について：その2

写真2　前傾坐位姿勢による遊びの展開

座位保持装置を利用して、子どもと養育者がごっこ遊びをしている場面である。養育者は、子どもの上肢・手を様々な方向に誘導しやすくなり、その結果として子どもの気持ちや意思を映し出すような声かけが多くなり遊びが展開する。養育者が示す対象物や動作への注視点移行が子どもの反応に加わると養育者は子どもの意志や目的をさらに理解しやすくなる。子どもは、視野内で遊びが展開されることで楽しい事象として受け止めることができ、もう一度やりたいという意欲につながっていく。このような関係発達を促すことは、人や環境の変化に対する適応性を増すことであり、概念学習にもつながると思われる（写真3）。

写真3　前傾坐位姿勢による概念学習場面

4.おわりに

運動障害を伴う子どもたちの運動を促進する場合、運動への達成動機や達成目標が必要である。この動機づけや目標設定は、援助者との関係で成立する。これは、見る・見られる、模倣する・される関係から養われる部分も大きいと思う。このため、早期からの対面的アプローチも重要と考える。

【文献】

竹下秀子:赤ちゃんの手とまなざし　ことばを生みだす進化の道すじ、岩波科学ライブラリー78、岩波書店、2001年。